

明末・清初の『玉臺新詠』研究の確立

植 木 久 行

(一)

六朝期の艶詩の總集『玉臺新詠』の研究史において、明末・清初の時期は、この書に對する關心が急速に高まり、多くの校本や注釋書が作られて、今日の『玉臺新詠』研究の基礎が確立した時期として位置づけられるように思われる。

この機運を導いたのは、吳郡（蘇州）の藏書家趙均（一五九一～一六四〇）が所藏した宋版（南宋の陳玉父本）の存在と、明末の崇禎六年（一六三三）における趙均自身の覆宋本の刊行であつた。當時、蘇州付近には、毛氏の汲古閣を始めとして書籍収集家が家藏の貴重書を出版する傾向が顯著になるが、この趙均覆宋本の刊行も、そうした傾向の一端として捉えることができるだろう。

明代通行の『玉臺新詠』本については、別稿で論ずる豫定であり、本稿では、その詳細な検討を省くが、明刊本の實態が、どういふものであつたかについては、清末の沈德壽撰『抱經樓藏書志』卷62の中に、

玉臺新詠有宋刻、有俗刻。蓋不獨卷帙先後、詩人姓氏均有不同。卽選詩亦互異。此古本・新本之所由分也。

とある記述によつて、ほぼ推測することができる。①同じ詩の所收卷數の異同、②作者名の異同、③所收作品の異同。この三點は、宋版と明代の俗本との主な差異である。たとえ、内閣文庫に藏する明刊本の一つについて述べると、その卷五は宋版の卷七、卷六は宋版の卷五、卷七は宋版の卷六にほぼ相當し、また一部の卷では、所收詩人の名を異にする。しかも、宋版に所收されていない詩を約一八〇首收めてお

(2)り、宋版不收の昭明太子の詩を八首収めている點も特に注目
に値する。もちろん、明刊本のすべてが、このような俗本で
あるわけではなく、たとえば、四部叢刊に收める五雲溪館活
字本の所收作品は、かえって宋版より若干少ない(ただし、
誤脱が多い)。しかも、程琰が吳兆宜の『箋註』本の中で對
校した徐學謨の明刊本も、内閣所藏本と同様に、約一八〇
首、宋版より多い點は注意されてよい。

なぜ、明代の通行本に、このような著しい詩の増入現象や
亂れが生じたのであろうか。このことは、明末の『玉臺新
詠』の再發見とその研究とも関連しており、注意しておくべ
きことであらう。

明代の中期は、周知のごとく、いわゆる前七子・後七子ら
による古文辭派の文學主張が一世を風靡した時期であった。
〈詩は盛唐、文は秦漢〉という排他的な文學史觀、および詩
文實作における、それらの古典への合致をひたすらめざす擬
古的傾向、さらに摸擬剽窃のみに汲々とする安易な創作態度
は、一面において、確かに廣範な詩文實作層の要求を満足さ
せるものであった。このような古文辭派の全盛時代には、盛
唐詩ではない、六朝詩の總集である『玉臺新詠』が、ほとん
ど顧みられなかったのも、いわば當然のことであった。嘉靖

十九年(一五四〇)の鄭玄撫撰「刻玉臺新詠後序」(3)によれば、
鄭玄撫みずから『續玉臺新詠』五卷を編纂し、徐陵撰『玉臺
新詠』十卷の後に付載して刊行しようと思ひ、友人の方敬明
に相談したところ、「時に唐調を宗ぶに、子獨り遐音(遐き
六朝文學)を憚ぶ。乃ち拘りて未だ通ぜざること無からん
や」と諫められたという。明中期における六朝詩の不人氣を
端的に物語るものであらう。

また明末の天啓二年(一六二二)に書かれた錢塘の沈逢春
撰「玉臺新詠序」の中にも、同じ趣旨のことを、「今の人は
唐有るを知るも、唐以前を知らず。其の三百篇の脈に接する
者、漢魏六朝の諸篇は故より在り」と記されている。六朝期
の總集である『玉臺新詠』に亂れが生じたのも、いわば當然
のことであった。

このように明中期においては、『玉臺新詠』は、盛唐ならぬ
六朝期の詩集であったゆえに、ほとんど顧みられなかったが、
明末における古文辭派への批判や是正の擡頭とともに、『玉
臺新詠』は改めて注目されはじめる。古文辭派の〈詩は盛
唐、古詩は漢魏〉という排他的な文學史觀に對して、部分的
な修正を行い、〈視野の擴大〉を通して、その狹益な文學史
觀等を是正しようとする文學運動が勃發したのである。いい

かえれば、明末の古文辭派批判や是正は、一面において、文學史に對する認識の再検討であり、この再検討の中から、從來冷遇されがちであった六朝文學の再發見・再認識の可能性が生まれてきたといえよう。『玉臺新詠』に對する關心は、この經緯を如實にあらわすものとして注目される。

内閣文庫所藏本の一つには、古文辭派批判への口火をきつたとされる公安派の袁宏道（一五六八—一六一〇）撰「玉臺新詠序」が付載されており、「徐の鑒賞、當に自ら苟めならざるべし」とあり、また『玉臺新詠』に對して、「清新俊逸、斌媚艷冶、錦綺交錯、色々逼真」と評している。この序文が袁宏道自身のものとするならば、『玉臺新詠』の再發見・再認識の過程において、反古文辭派の文學思潮が強く働いていたことの證左となるだろう。すでに引いた沈逢春は、「中郎（袁宏道）は情を以て鑒賞し、且つ之を品題し、之に序せりと述べている。

さらに、このことを證するのは、『玉臺新詠』の研究を推進し、その校本をそれぞれもつ常熟の馮舒・馮班兄弟が、その文學論において、古文辭派批判の立場にあることである。馮舒・馮班兄弟は、李商隱の感傷性・修辭性等を祖述する北宋初めの西崑體を高く評價し、黃庭堅を祖とあおぐ南宋初め

の江西詩派の古拙さを強く批判した。二人による『二馮評點才調集』十卷の編集は、この文學的立場による産物である。しかし、兩者には、微妙な差異があったらしい。二人の甥にあたる馮武の言葉によれば、

默庵（馮舒）以杜樊川（杜牧）爲宗、而廣其道於香山（白居易）・微之（元稹）。鈍吟（馮班）以溫（庭筠）・李（商隱）爲宗、而溯其源於騷選漢魏六朝。

とあり、弟の馮班のほうが六朝文學への志向が強かったらしい。しかし、兩者とも（詩は盛唐）の限定を離れて、中唐詩や晚唐詩を愛好している點は特に注意されてよい。馮班の古文辭批判は、『清史列傳』卷70の本傳に、

其論詩謂、王（世貞）・李（攀龍）死擬盛唐、戒不讀唐以後書。詩道因是大壞。爰窮流溯源、自三百篇以下、一一考其根柢、明其變化。

とある言葉によつて、いっそう明確に理解することができる。しかも、兄の馮舒は、江南にあった數多くの詩社・文社を糾合して、崇禎初年に成立した張傳（一六〇二—一六四二）の復社から招かれたことがあるという。復社は、いうまでもなく、古文辭派の排他的な文學主張を部分的に修正し、復古の目標を従来の激烈・壯大な古代精神から六朝期の精神へと

置きかえた文學結社であった。たまたま馮舒の父の名が復京であったため、諱に觸れるとして復社に参加することはなかった。この復社と『玉臺新詠』との關係は、これのみにとどまらない。明末の趙均が覆宋本を刊行した崇禎六年は、その出版場所と同じ蘇州の地で盛大な文學大會が開催され、二千人以上の出席者があつた年でもある。『玉臺新詠箋註』を書いた吳兆宜の兄の吳兆騫も、この復社との關係があることは、後述する通りである。しかも馮舒・馮班兄弟の父の馮復京は、古文辭派批判に終止符をうった錢謙益の友人であり、馮班などは、その門下に遊んでいる。『玉臺新詠』の再發見・再認識は、明末のこうした古文辭派批判の風氣の中であらわれた一つの成果であつたわけである。

(二)

『玉臺新詠』研究は、もちろん、こうした文學思潮と密接に關連するわけであるが、同時にまた、明の嘉靖三十九年(一五六〇)に刊行された馮惟訥(一五一三—一五七二)編の『(古)詩紀』以降、張之象・臧懋循・梅鼎祚・張燮・鍾惺・譚元春・張傳らによって陸續と出版された漢魏六朝詩文集の編纂と、それを求める風氣とも當然關係していると思われ

る。校勘の學を含む廣義の研究は、必然的に書籍の収集や出版などと密接に關連せざるをえないからである。明末・清初の蘇州付近は、錢謙益・錢曾・徐健學・毛晉らの著名な藏書家が集中した地域であり、この時期、出版業も興隆していた。『玉臺新詠』の宋版(陳玉父本)を藏した趙均は、父の趙宦光とともに父子二代にわたる著名な藏書家であり、その藏書樓である小宛堂については、錢謙益が「小宛之堂、芸籤縹帶、亦如所謂連鱸臯舳」と述べている。

馮氏校本の著者として知られる馮舒(一五九三—一六四五?)は、すでに述べたような明刊本の粗悪さを見るにつけ、善本に對する熾烈な憧憬をますます深めて、次のように語っている。

嘗憶、少年侍先府君(馮復京)、每疑、此集緣本東朝、事先天監(年間)、何緣子山(庾信)竄入北之篇、孝穆(徐陵)濫擊牋之曲。意欲諦正、時無善本、良用撫然。

馮舒の關心は、もちろん單なる珍本の閱覽や宋版収集にあつたのではなく、より學問的な精神に根ざしていた。つまり、梁代成立と考えられる『玉臺新詠』の中に、どうして庾信や徐陵らの北周・陳代の作品が含まれているのか、という素朴かつ重大な疑問であり、それゆえにこそ、明人の改竄を

經ない善本を入手して、「原初形態」を探りたいと考えたのである。この馮舒の回想は、趙均の跋文のなかにも、あらためてくり返されている。

虞山馮已蒼（舒）未見舊本時、常病此書原始梁朝、何緣子山厠入北之篇、孝穆濫擘箋之詠。此本則簡文尙稱皇太子、元帝亦稱湘東王、可以明證。惟武帝之署梁朝、孝穆之列陳銜、並獨不稱名。此一經子姓書、一爲後人更定、無疑也。得此、始盡釋群疑耳。

庾信の「入北の篇」とは、明刊本に收める増入詩「怨詩」などであろう。『箋註』本には、宋刻不收として卷九に收め、『箋註』を刪補した程琰も北周時代の作品と考えている。徐陵の「擘箋の詠（曲）」が、何を指すのかは明確ではないが、『箋註』本の卷九に「宋刻不收」として收める「烏棲曲」や「雜曲」などを指すと思われる。

徐陵の『玉臺新詠』編纂については、最も信頼すべき正史の本傳等に、その記載がなく、しかも今日傳わるテキストにはみな「陳尙書左僕射太子少傅東海徐陵孝穆撰」とあり、一見、陳代成立のごとく思われるからである。すでに引いた明の鄭玄撰「刻玉臺新詠序」には、

徐陵世膺陳爵、恒猷厥訓。乃進新詠十卷、以備宮體。

とあり、鄭玄撰は陳代の成立と考えていたらしい。これに對して、覆宋本を刊行した趙均は跋文の中で、唐の劉肅撰『大唐新語』の説を引いて、梁の簡文帝が徐陵に命じて編纂させたことを述べ、同時に宋版の中に簡文帝を皇太子、元帝を湘東王と書く稱號に着目して、本書の梁代成立説を一層強固にしたのであった。そしてその他の矛盾——「梁」の武帝、「陳」の徐陵撰の二字の解釋については、子姓（子孫・遺族）や後人の付加と考えた。⁽¹⁰⁾ この説はそのまま『四庫提要』等に取り入れられ、今日においても通用している。

校勘學者馮舒は、趙均の家で海内の孤本とも稱すべき宋版を目睹し、それを抄寫することのできた喜びを、次のように記している。

己巳（崇禎二年）の早春、宋刻有り、寒山の趙靈均の所に在るを聞く。乃ち是の冬に、我が執友を挈へ、我が令弟と偕に其の廬に造る。既に奉觀するを得て、共に壁を時に傳ふるを欣ぶなり。素雪 堦を覆ひ、寒凌 研に觸る。六人の功を合はせて、之を鈔し、四日の夜にして畢る。飢うるも咽むに暇ある無し。或いは酒の煖かさに資り、寒きも指を墮ふを忘れ、唯だ燭の滅ゆるを憂ふ。知らざる者は以て狂人と爲し、知音も亦た託きて好事と爲せり。

明末の崇禎二年（一六二九）、時に二十九歳の馮舒の驚喜が生々しく傳わる文章である。この時の寫本を基にしたのであるか、馮氏校定『玉臺新詠』十卷が作成されている。この馮氏校本は、趙均所藏の宋版を底本として用い、諸本を參考にして作られたものである。清の馮鰲がその「玉臺新詠例言四則」のなかで、「默庵公、此の書を較訂して、一へに宋刻を以て正と爲す」と評しているように、いささか宋版にとらわれすぎたことも事實のようである。内閣文庫に藏する虞山二馮先生闕本（錫山華綺天和校刻、保元堂藏版）は、表紙に「馮氏校本」と表記されているが、もちろん『四庫提要』存目に著録する馮氏校本と同一ではない。その書に付す圈點は、馮鈍吟公（馮班）によるものであるが、校記は主として馮舒のものと考えてよさそうである。紀容舒の『考異』中に引く馮氏校本とおおむね重なるからである。

内閣文庫所藏本によれば、馮舒の校注として、いくつかの點が注目される。宋版の目錄上の誤りを正したり、詩數の數え方を異にしていることなどのほか、卷二に收める「塘上行」の作者甄皇后（宋版）を改めて魏の武帝とした結果、その詩を卷二の卷頭に置いたことである。また陳玉父の原注を残し、宋版との注記が多く、五雲溪館活字本や楊元鑰本との對校も

試みている。しかし、特に注意すべき點は、南宋の陳玉父が「目（目錄）に三首に作る。此の首、衍なるかと疑ふ」と注記しながらも、宋版の中にのせた卷七の最後の詩（「聞妾送征人」）をけずっている點である。

本書の注記は、紀容舒の『考異』にくらべて微々たるものであるが、卷六の終りにある徐悱の「答唐娘七夕所穿針」詩一首に對して、

徐悱及妻劉令嫺詩、俱見前。此首疑後人所僂入、或悱字悞。

と述べた説も注目される。宋の陳玉父の疑った詩の増入例以外に、宋版中に含まれる詩の僂入を疑ったのである。これらの點は、紀容舒の『考異』本の中で、さらに敷衍して論じられている。

崇禎二年、長兄の馮舒に隨行して、趙均の家を訪れた（令弟）として、次弟の馮班（一六一四～一六七二）や末弟の馮知十が數えられそうである。いずれも校勘學者としてすぐれ、抄本の名家でもある。馮班については、『北京圖書館善本書目』卷八に、明の崇禎二年の馮班抄本（馮班・何雲校並跋）『玉臺新詠』十卷（四冊）が著録されていることよって確認することができる。當時、馮班は十六歳である。また同條には、

清の翁心存が〈馮知十影宋抄本〉を影抄した書(一冊)が著録されていることからすれば、馮知十も同行したのではないかと憶測される。しかし、末弟でもあり、年齢的に少し無理かも知れない。その場合には、趙氏舊藏宋版を後に入手した錢曾が、馮氏兄弟と友人關係にあつたので、馮知十は錢曾から直接借覽して抄寫したものであらう。

馮班には、實は崇禎二年の抄本のほかに清初の順治六年(二六四九)、三十六歳のとき、親友の錢曾から趙均舊藏宋版を借覽して作成した本がある。「己丑の歲、宋刻本を借り得て、校過すること一次」とみずから記す書である。

馮舒・馮班のいわゆる二馮撰『玉臺新詠』の校本は、當時かなり重んじられたらしい。清の程琰の跋文にも、

靈均趙氏、仿宋槧板、虞山二馮、校正之。最爲善本。

とある。當時すでに趙均覆宋本が刊行されてはいたが、宋版それ自體が悪名高い麻沙本であるとされ、誤訛の多さ・體例の不備・詩の増入等があつたからでもあらう。ここに校本の必要とされる理由がある。『箋註』本には、孫法頂と葉樹廉の題記も收められている。まず孫法頂のものを引く。

辛卯三月一日、假馮氏校定本對讀、不獨其辨魯魚、且并存其字體、至三日早晨訖。

明末・清初の『玉臺新詠』研究の確立(植木)

文中の「辛卯三月一日」とは、順治七年(一六五〇)のことと推定され、「馮氏校定本」とは兄の馮舒の校本であらう。孫法頂はわずか三日間で一氣に對校し、字體までも寫したのである。

この後、わずか十二日ほど遅れた三月十五日、この孫法頂の校本を借り、また弟の馮班の校本を參照して、綿密な校勘作業を行ったのが、當時、馮班らの郷里常熟(虞山)に住んでいた有名な藏書家、葉樹廉(一六一八〜一六八四)であつた。時に三十三歳である。葉樹廉はまた一名を萬といい、號は南陽穀道人、家藏の書はみな眞贋を分かち、みずから校正したといわれる校勘學者である。

是月十五日、借孫本對錄異同、亦照馮本參量圈點、增其不足、廣其所用、藏之篋中、俾補吟詠。因憶、此書、余十六歲收藏、時靈均新刊、同志愛之若珍。後從錢太史得京山李跋本、勘過一次。遂同摹宋本才調集爲枕中之玩。至今閱十七年、乃得重勘。可謂遠矣。

この識語によれば、葉樹廉は刊行されたばかりの趙均覆宋本を同年(崇禎六年)、十六歳のときに入手し、後、京山の李維植(一五四七〜一六二六)の跋を有するテキストを入手して校勘した。そして十七年後の順治七年、馮班・孫法頂二人の

校本を参照して重ねて校勘したことになる。『玉臺新詠』の校本作成への執念を感じさせる話である。臺灣の『國立中央圖書館善本書目』（甲編、卷四）に、〈明崇禎六年吳郡趙氏覆宋陳玉父本『玉臺新詠』十卷一冊、清葉萬手校並跋、兼過錄馮二癡等校語、又徐鈞手書題記〉として著録するものは、おそらくこの葉樹廉校本の形態を最もよく伝えるものであろう。この葉氏の校勘の精密さは、つとに『義門讀書記』で知られる校勘學者何義門（一六六一—一七二二）によって高く評價されるところであり、校本としての價值も、決して低くないと思われる。

また弟の馮班的校本は、藏書家として葉樹廉と並稱された葉奕の次子葉裕（一六三五—一六五九）の校本にも影響をあたえている。葉裕は錢謙益の門下に遊び、二十五歳の若さで夭逝した校勘學者である。清の瞿鏞の『鐵琴銅劍樓藏書目錄』卷23、玉臺新詠の條には、

四庫全書總目謂、趙宦光家所傳宋刻、有嘉定乙亥陳玉父重刻跋。卽此本所自出也。吳郡葉裕又從馮定遠藏宋本校過。

とあり、卷首に「東吳葉裕祖仁藏書」の朱記があるという。

解題中の「馮定遠（馮班）藏宋本」というのは、崇禎二年（一

六二九）に抄した寫本、もしくは、順治六年（一六四九）の校本をいうのであろう。ちなみに、葉裕校並跋（明崇禎六年趙均刻本、許世忠校一冊）の『玉臺新詠』本が、現在、北京圖書館の中に藏されている。葉裕の底本は、やはり趙均覆宋本であつたらしい。

(三)

ここで、趙均覆宋本について觸れたい。この覆宋本は、今日、積學齋叢書等の刊行で知られる南陵の徐乃昌の舊藏書が影印されて、容易に手に入れることができる。つまり、南陵徐乃昌校勘經籍記や積學齋徐乃昌藏書等の藏書印が押されているものである。徐乃昌は民國十一年（一九二二）、札記を附してこの覆宋本を影印し、その後、一九五五年三月には、北京の文學古籍刊行社で同書を再影印して出版している。その本は、當然ながら徐乃昌の札記を缺くものの、卷末には、編輯部が紀容舒の『考異』に基づいて十七箇所、訂正した「勘誤表」が付されている。出版説明中の「現在我們據向達先生藏明寒山趙氏刊本影印」の語によれば、敦煌學の研究や『唐代長安與西域文明』の著書等で知られる向達氏の藏書（徐乃昌舊藏本）であつたらしい。この徐乃昌舊藏本の影印は、そ

の後、臺灣の中國學術名著第一輯（世界書局）に收められ、また文光圖書公司印行の本もある。

しかし、趙均覆宋本の最も早い覆刻は、わが國の文化三年（一八〇六）、江戸の昌平坂學問所から刊行された、いわゆる官板である。今日、内閣文庫等に現存するが、唐人選唐詩の大部分の官板と同様に、傳本が非常にまれである。官板とは、弘化四年（一八四七）に出版された『官版書籍解題略』の凡例に、「宋元ノ槧本、及び諸家精校ノ善本ヲ以テ官刻セシメ」たものであり、本書も趙均覆宋本と行款を全く等しくし、影印本と少しも變わらぬ精妙なできばえである。朱子學の尊重された江戸時代において、この官板が刊行されたことは、『玉臺新詠』が艷詩の總集であるだけに、當時の見識の高さを表すものと考えてよい。

官板はまた特定の書店が板賃をおさめると、刊行が許可されるが、この書に關しては、文化六年（一八〇九）仲秋の東都書林、日本橋通壹町目の須原屋茂兵衛（千鐘房）の奥付を有する重刻本が、現在、靜嘉堂文庫等に傳わっている。ちなみに、この官板（文化三年）を底本として譯注を行ったのが、鈴木虎雄博士譯解の『玉臺新詠集』（岩波文庫）である。

趙均覆宋本の版式については、一九六一年に刊行された北

明末・清初の『玉臺新詠』研究の確立（植木）

京圖書館編『中國版刻圖錄』（増訂本）の中に、次のように記されている。⁽¹²⁾

匡高二〇・五厘米、廣一三・三厘米、十五行、行三十
字。白口左右雙邊。崇禎六年、趙均刻蘇州。均字靈均、偕
妻文端容、隱於寒山、世爲藏書名家。……密行細字、版
式精雅、在諸本中爲最善之本。

蘇州で刊行されたこの線黒口の密行細字本は、趙均の「崇禎六年歲次癸酉四月既望」と署名する跋文によって、いちおう明末の崇禎六年（一六三三）の夏の刊行と考えられる。現代の潘景鄭がその『著硯樓書跋』の中で、

念へば、此の書、靈均、崇禎癸酉に摹刻す。明祚の移を距つること、纔かに十年のみ。

と述べたように、覆宋本の刊行は明滅亡直前の騷擾たる時代であった。またこの刊行年時が馮舒兄弟の訪れた崇禎二年後、わずかに四年のできごとであり、覆宋本の刊行はおそらく馮氏兄弟の熱意に動かされた結果であろう。趙均の跋文の中に、「虞山の馮已蒼、未だ舊本を見ざる時、云々」と記されていることは、この推測を裏づけるものである。

趙均自身の跋文中の指摘のなかで、たとえば、『大唐新語』の説を引用した意義や、宋版にみられる蕭綱等の稱號に關す

る指摘の重要性は、すでに述べたので、ここでは、それ以外の注目すべき指摘について觸れたい。まず①「得詩七百六十九篇、世所通行、妄増又幾二百」とする記述である。明刊本が約一八〇首の詩を増入させ、逆に二十首以上脱していることについては、すでに述べたが、このことは明の李維楨の題記⁽¹³⁾にも、

有客從關中來、携宋刻玉臺新詠一帙、示余。較今之行世本、十減三四。而每卷首俱名不同、而増者有十之一、且卷中字句與今大不類。

と述べられている。趙均の述べた妄増詩約二百とする説は、以後しばしばくり返される。錢謙益（一五八二—一六六四）の「跋玉臺新詠」⁽¹⁴⁾の中にも、「妄りに詩を増すこと二百首、此の本（趙均舊藏宋版）に頼りて、少しく孝穆（徐陵）の舊觀を存す。良に寶とすべきなり」と述べられている。こうした共通の認識があったために、趙均の宋版とその覆刻本は、當時おのずから高い評價を獲得したのである。

このほか、②庾信の「七夕」詩が宋刻にのみ見えて、別集の中にみえないと指摘した。ここで特に「宋刻」とことわっているのは、一般の明刊本には、「七夕」詩を脱しているからである。つまり、別集に未収録の作品を持つという指摘

は、『玉臺新詠』、特に宋版のもつ價值を高めることになる。③徐幹の「室思」詩のような詩題に關する誤りを正しうるとも述べている。

このように、この宋版のもつ價值は、『文選』などの宋版にくらべて、比較できぬほどの價值をもつ。それは、一つの總集の中に約二百首の詩が増入されたという實例は、ほとんどほかには考えられないからである。

この趙均覆宋本に對して、當時、どういふ評價が下されたのであろうか。清初の王漁洋（一六二四—一七一）は、

予在京師、曾見宋刻。此吳中寒山趙氏臨刻本、可謂逼眞⁽¹⁵⁾。

と評し、またすでに引いた葉樹廉の識語には、「時に靈均新に刊し、同志、これを愛すること珍のごとし」と記されている。このように、刊行當初から評判はすこぶる高く、そのできばえのよさは、明末覆宋本中の精刻と評してもよいだろう。

しかし、批判が全くないわけではない。清初の順治六年、錢曾から趙氏舊藏の宋版を借覽した馮班は、

宋刻訛謬甚多。趙氏所改、得失相半。姑兩存之、不敢妄斷。至於行款、則宋刻參差不一、趙氏已整齊一番。

と述べている。これによれば、趙均覆宋本は、

①趙均自身の校改の部分をもつ。

②宋版の“參差不一”の行款を意識的に整えたこと。

の二點をもち、純然たる複製本ではない。①については、跋文の中に、同志をあつめて詳しく對證を加えたとあり、それは宋版自體が誤謬の多い書であつたからである。趙均自身、「隨珠、類多し」などと喩えている。②に關しては、馮鰲の「玉臺新詠四則」の中にも、「昔、寒山趙氏、意を加へて搜訪し、曾て整齊すること一番」と記されている。

しかし、宋版の失われた現在、この覆宋本のもつ價值は決して低く評價されるべきではない。清の著名な書誌學者莫友芝（一八一七—一八七二）は、「此れを得れば、則ち其の他の諸刻は、皆論ずるに足らず」と評したとされ、潘景鄭の『著硯樓書跋』には、

非此刻、無由窺天水之面目。玉父劖阿之業、苟無寒山覆刊之功、則此本種子斷絕、而俗本益復眩惑、後人又何從而得是正耶。

と記されている。天水とは趙宋の意。確かに趙寒山（均）の覆宋本を通してこそ、はじめて南宋期の『玉臺新詠』本の姿を窺うことができるのである。この趙均所藏の宋版とその覆

刻本の刊行がなかったならば、明末・清初における研究も、おそらく中途で頓挫せざるをえなかったであろう。この時期作られた校本は、ほとんどみな趙均覆宋本を底本としている。

『箋註』本にのせる清初の徐鉉（一八六五—一九二七）は、覆宋本の刊行について、その精妙さをたたえた後、

然聞滄桑以後、斯板已經燬廢。當時所印止百十餘本。宋刻原本不知存亡、而是書亦流傳無幾。觸手磨滅、紙墨粲然、不勝東京夢華之感。

と述べている。特に注目されるのは、刊行部數を「止だ百十餘本」とすることである。さらに明末・清初の騷擾たる世情の中で、その板木は焼かれ、「流傳も幾くも無き」状態であると記されるが、①時代が比較的近い、②趙均覆宋本が流俗本と異なって宋版の面目を伝えること、③卷末の趙均の跋文を取りさつて、宋版として賣られたこと、などの三點を主な理由とするのであろう、今日、この覆宋本はかなり傳わっている。葉德輝（一八六五—一九二七）が、「趙本獨り重名を負ふは、則ち趙本の世に傳ふること、獨り多きを以てなるのみ」（『郎園讀書志』卷15）と述べているのは、いささか酷評にすぎないが、趙本が今日かなり傳存していることは事實であ

る。このことは特に第③と密接に關連してゐると思われる。

書誌學者として著名な張元濟（一八七一—一九六一）が、『涵芬樓燼餘書錄』の中で、

卷末原有崇禎六年癸酉四月趙均跋。書估每撤去、僞充宋刻。此亦不存。

と述べる（馬芻齋ら舊藏『玉臺新詠』十卷の條）ように、趙均覆宋本は、多くその卷末の趙均の跋文を削り去つて、宋版として賣られていた。これが趙本の多く傳存する重要な原因であつたことはほゞ疑いない。

『玉臺新詠箋註』を書いた吳兆宜の妹婿である徐鉉は、同じ文の中で「宋刻の原本、存亡を知らず」とも述べているが、この題記を書いたと推測される康熙十四年（一六七五）ごろには、趙氏舊藏の宋版は、常熟の著名な藏書家錢曾（一六二九—一七〇一）の架藏に歸してゐたと推定される。その『讀書敏求記』卷四の『玉臺新詠集』の條には、「此の本は寒山の趙氏より出づ。予、之を黃子羽に得たり」とある。黃子羽とは、同じ常熟の藏書家黃翼聖（一五九六—一六五九）のことであるが、錢曾が黃翼聖から、いつ趙氏舊藏本を手に入れたかについては、よくわからない。ただ馮班が順治六年（一六四九）に、錢曾からこの宋版を借覽してゐることからすれば、

清初の順治年間にはすでに錢曾の架藏に歸してゐたわけである。葉德輝は、「牧翁、宋刻を推重す。絳雲の火後、其の藏書は盡く以て族子の曾に畀ふ。此の書も其の内に在り」と述べて、錢曾所藏の宋元版の藏書家として著名な錢謙益の舊藏書であつたとする。この説は、おそらく錢謙益の「跋玉臺新詠」の中に「玉臺新詠刻本、出自寒山趙氏」とする記述に基づいて、この宋版も一時、その絳雲樓に藏されてゐたと推測したのであらう。しかし、絳雲樓の火災は清初の順治七年（一六五〇）の十月二日の夜のできごとであり、その一年前に、馮班が「今は錢遵王（錢曾）に歸す」この宋版を借覽してゐる以上、葉氏の説は明らかな誤りである。錢謙益は、おそらく錢曾所藏の宋版を見て、跋を書いたのであらう。

趙均が家藏の宋版に基づいて覆刻本を出版した崇禎六年（一六三三）までは、趙均が所藏してゐたことはほゞ確實であり、その後、黃翼聖を経て、順治六年（一六四九）には、すでに錢曾に歸してゐたことになる。この間、わずか十六年のできごとである。趙均の藏書は、その死後、ことごとく散じたとされるので、假りに趙均の死（一六四〇）後、黃翼聖の架藏に歸したと憶測すれば、黃翼聖の所藏期間は十年に満たないことになる。

紀容舒の『考異』序に據れば、この趙氏舊藏本は、後、やがて紀容舒の藏書となり、紀氏は、この宋版を底本として『玉臺新詠考異』十卷を作成した。この宋版を繼承したのは、四庫全書館の總裁として知られる子の紀昀（一七二四～一八〇五）であった。従って、『玉臺新詠』の四庫全書本の底本は、ほかならぬ紀昀所藏の宋版である。また紀昀自身にも、『玉臺新詠校正』十卷があることは、『北京圖書館善本書目』巻八に、稿本二冊と清の擷英書屋抄本二冊の二部が藏されていることよって知ることができる。ちなみに、『増訂四庫簡明目録標注』の『玉臺新詠考異』の條には、「此の書は文達（紀昀）自ら撰し、これを父（紀容舒）に歸するなり」とする奇抜な説がみられるが、父の『考異』本と子の『校正』本との關係や異同は、詳かではない。この紀昀以後、宋版のゆくえは杳として知れなくなる。

いづれにせよ、趙均舊藏宋版が黃翼聖・錢曾・紀容舒・紀昀という有名な收藏家をへてきたことは、もちろん明末以來の宋版所藏を誇る風潮とも無關係ではないが、より重要な點は、明末・清初において、信頼すべき宋版は、ほとんどこの趙均舊藏本以外にはなかったことである。趙均舊藏の陳玉父本は、まさしく海内の孤本とも稱すべき貴重な書であったわ

けである。

(四)

趙均覆宋本の刊行後、この書を底本として用い、『玉臺新詠』の注釋を初めて試みたのは、清初における六朝詩・唐詩の研究者吳兆宜（字顯令）であった。吳兆宜が乾隆十四年（一六七五）に記した序によれば、『文選』と『玉臺新詠』は六朝文學の古い總集として並稱されるが、『玉臺新詠』には『文選』の六臣注に匹敵すべき注釋書のないのを残念に思い、箋注作成を決意したという。その序には、ひき續いて、

今年、余適館一作餘玉峯之傳是樓。樓多藏書。乃廣搜博採、取此書、注以傳世。

とあり、吳兆宜の使用したテキストは家藏本ではなく、實は徐乾學（一六三一～一六八四）の有名な藏書樓「傳是樓」の藏書であった。吳兆宜がそこから借りた『玉臺新詠』は、おそらく一種類ではなく、明代の通行本を含めて、二、三種類はあったであろうと憶測される。『秋筵集』の著で知られる兄の吳兆騫（一六三一～一六八四）は、明史館の總裁を長くつとめた徐乾學の幕僚の一人である。従って吳兆宜は徐乾學と面識があったと思われる。

吳兆宜自身は底本について直接述べていないが、彼と同郷の吳江の人で、しかも妹婿(17)にあたる徐軌の題記には、

内兄吳君顯令、昔年嗜古、取此本、箋註傳世。定與孝穆並垂不朽、而靈均之功、亦藉以顯云。

とあり、底本が靈均(趙均)覆宋本であることがわかる。このことは、また「宋刻」に收めるとする詩が趙本と同じことによっても裏づけることができる。

吳兆宜の序文の中で、最も問題となるのは、實は次の部分である。

孝穆所選詩、凡八百七十章。其入昭明選者、六十九。宋刻不收者、一百七十九。

吳兆宜は趙本を底本としつつも、各卷末に「宋刻不收」として覆宋本に收めていない詩歌をも收めている。このことについて、小尾郊一博士は『玉臺新詠索引』の解説の中で、

今吳兆宜本は全部で八四一首であり、それは趙均本より一七九首多い。ただ卷一、徐幹の「室思」を標題で一首といいながら、實際は六首に吳兆宜は數えているようなことがあり、彼の序ではすべて八七〇章というが、標題の數の合計と合わない。

と述べている。宋刻不收の作品は、劉宋から梁代にかけて多

く、卷一と卷二はなく、以下、卷三(2)、卷四(12)、卷五(11)、卷六(9)、卷七(29)、卷八(46)、卷九(40)、卷十(30)となっている。

ここで、『箋註』所收の實際作品數(八四一)が吳氏のいう「八百七十章」とあわない點はしばらく置くとして、宋刻不收の作品數を引くと、宋刻所收の作品數は六六二(吳氏の標題に従えば六九一章)となり、趙均の跋の「得詩七百六十九篇、世所通行、妄增又幾二百」との異同が問題になってくる。宋刻不收の作品數の一七九首は「幾ど二百」に相當するが、六六二(もしくは六九一章)はやはり趙均の「七百六十九篇」とかなり相異しているのである。これらの點に關して、小尾博士は、

一七九首の増加した詩も、もと玉臺新詠に收められていた如くいうが、おそらく「艷歌」という基準で、かかる詩も收められていたであろうという考えから増加したものであろう。

と述べ、また程琰の跋文中の「其各卷後所增詩、宋槧不載、從顯令注本增入者也」の言葉を解釋して

各卷末に増加しているのは、宋本になくて吳兆宜が増したものである。

と述べられている。この小尾博士の説は誤解を引きおこしやすい。というのは、この宋刻不收の約一八〇首の詩は、すでに述べた内閣文庫所蔵の明刊本や程琰の引く徐學謨の明刊本等にほとんどみな見えるものであり、吳兆宜が独自の判断に基づいて、當時傳わる總集や別集から選んだものではないからである。このことについては、『四庫提要』の『箋註』本の條に、

惟每卷以明人濫增之作、退之卷末。註曰、以下、宋本所無。較諸本爲善。

とある記述によつて、一層明瞭に理解できるわけである。吳兆宜は明代の通行本中に含まれる増入詩を容赦なく削りずることをせず、それらの詩も同じく六朝期の艶詩であると考へて注したわけであろう。この點、内田泉之助博士の譯注本(明治書院)が「例言」の中で清朝の『吳兆宜原註』本を底本としたといひながら、實は「宋刻不收」の作品を一首も收めないのと著しい對照をなしている。

このように考えると、この「宋刻不收」の部分こそ、明代の通行本中に收められていた「妄增」詩約二百首を端的に表すものであり、明刊本が必ずしも容易に見られない現在、明代の通行本が宋版といかに違つていたかを如實に知る貴重な

資料といふべきであらう。吳兆宜みずから「艶歌」の基準に基づいて詩を選録したのではない。

すると、吳兆宜はなぜ序の中で「孝穆の選びし所の詩は、凡て八百七十章」と述べたのであろうか。現在、所收する作品は、宋刻不收の詩をも含めて「八四一首」にすぎず、まだ三十首あまり少ないからである。ここにその理由を解く手がかりとなる記述がある。『箋註』本卷十の最後に付す程琰の按語がそうである。

宋本後有紅字寫宋刻玉臺新詠、計六百九十首。刻本止六百八十九首。宋刻時已亡其一。今馮本仍存六百九十首。顯令(吳兆宜)增宋刻不收者、一百七十九首。共八百六十九首。

宋刻の詩數を朱筆で書きこんだ宋本があり、それには、宋刻は「六百九十首」と記入されているという。所收作品はたとえ同じくとも、徐幹の「室思」詩などのように數え方の差異により、所收作品數は容易に二、三十首上下するが、程琰のいう「宋刻」は實は陳玉父本ではなかつたらしい。たとえ

宋刻七卷七十五首、此止七十一首、闕昭明太子四首故也。

宋刻五十五首、此多庾肩吾多曉一首、并後增四十六首、共一百零二首。

宋刻一百五十三首、今存一百五十五首、多二首、蓋後二首、活本所無也。

という按語をみても、このことが推測される。程琰のみた宋本には、全體の詩數のみならず、各卷の詩數も記されていたと考えられる。假りに程琰のいう宋刻の「六百九十首」に宋刻不收の作品（一七九首）を加えると、「八六九首」となり、吳兆宜のいう「孝穆選びし所の詩は、凡て八百七十章」という數字とわずか一首違いになる。またこの「八六九首」という數字は、趙均の跋の「得詩七百六十九篇」との奇妙な暗合に氣づかせる。つまり、趙跋の「七」を「八」の字の誤訛であるとするならば、まさしく數字が一致することになる。特に「七」と「八」は筆寫上しばしば誤りやすい。とすれば、吳兆宜は一般に明人の妄増詩とされている詩も、本來『玉臺新詠』の中に收められていたと考えたことになる。しかし、この憶測はやはり憶測の域を出ず、このくらいにとどめて置くべきであろう。

吳兆宜の『箋註』に觸りたい。『四庫提要』の『庚開集府箋註』十卷の條には、吳兆宜の簡略な傳記を記して、

兆宜、字顯令、吳江人、康熙中諸生、嘗註徐庾二集。又註玉臺新詠・才調集・韓偓詩集。今惟徐庾二集、刊版行世、餘惟鈔本僅存云。

という。韓偓（八四四〜九二三）とは、周知のごとく晩唐の詩人であり、その表現世界は『玉臺新詠』の艶詩とある種の共通性をもっている。また『才調集』『玉臺新詠』、さらに庾信・徐陵に強い關心を持つている點は、すでに述べた二馮のうちでも、特に馮班と嗜好を同じくしている。また兄の吳兆騫は『清史列傳』卷70に、

及長、繼復社主盟、才名動一世。

とあり、文學結社「復社」とのつながりを持っているのである。このように、吳兆宜兄弟は、いろいろな側面で二馮と共通している。

吳兆宜の註については、『四庫提要』の中に、

是書、引證頗博。然繁而無當。又多以後代之書、註前代之事、尤未允。

と評するとおりである。この繁雜で要領をえない憾みは、程琰が刪訂を加えた後にも感じられる。

『箋註』本を刪補した程琰（後に名を際盛と改む）の乾隆三十九年（一七七四）の跋文には、刪補の意圖や方法について、

適見松陵吳君顯令注本、頗徵詳贍、而疵類時有。中有鈔胥傳寫、烏焉亥豕、脫誤亦多。爰取以讎勘。原注引五經四子書中語、人所習見者汰之。載入文選及漢書者、本六臣注・顏注增刪之。評語採之齊次風先生。隙見偶及、有所疏通證明、每條加按字以別之。板從趙刻、與徐刻校對同異。其各卷後所增詩、宋槧不載、從顯令注本增入者也。

と述べている。吳兆宜の原註本は、後に引く阮學濬の跋文にも、「吳注は引證典核なりと雖も、胥鈔脫誤多し」とあり、刊本としては出版されず、寫本としてのみ傳わっていた。それで當時唯一の注釋書ではありながら、傳寫上の誤りや誤字・脱字が多かったのである。また程琰は『五經』や『四書』等の平易な出典を削るとともに、『文選』や『漢書』に基づくものは、その注をも考慮に入れて刪補している。

しかし、今一般に通行している刪補本が吳兆宜の原註本と異なる大きな點は、

- ① 齊次風の評語を取り入れたこと。
- ② 徐學謨の海曙樓本との詳しい對校。
- ③ 自分の説や詳細な考異を「按語」という形で記したこと。

の三點であろう。齊次風が地理學・歷史學の大家齊召南（一

七〇四―一七六八）であることは、「考訂姓氏」の條に「天台齊召南息國」とあることによっても知られる（『箋註』本）。その評語の一例あげると

古詩妙不可言、使集中皆如此、即近于國風矣。

（卷一の「古詩八首」）

とあり、その評語自體は特に論ずべき點もなく、ごく一般的なものにすぎない。

また歷史學者王鳴盛（一七二二―一七九七）の所藏した明の嘉靖年間刊行の徐學謨（一五二一―一五九三）本については、別稿で論ずる豫定であるが、すでに述べた内閣文庫所藏明刊本と同様に、「妄增幾ど二百」をもつ典型的な俗本であり、作品の所收卷數や題名作者名などの多方面にわたって宋版（覆宋本）と異なり、宋版不收の昭明太子の詩なども收めている。今日、この徐刻本も容易に見ることができず、その對校は少くとも歴史的價値があると評すべきであろう。特に『箋註』本を通して、宋版と明の代表的な俗本とを對比しながら参照できることは、たいそう便利である。

程琰の刪補本に對して、淮南の阮學濬は、次のような跋を書いている（乾隆三十九年）。

程子東冶、博學好古、取而訂之。吳注雖引證典核、而胥

鈔多脫誤。今則譌者悉正、且刪繁補闕、參以評點。洵爲善本。徐箋不及禪代諸製、後爲徐大文氏增補。此編得東治重訂、兩書皆全璧矣。

文中の「徐大文」とは、吳兆宜と同郷の吳江の人である徐文炳（字大文）のことをいう。吳兆宜は庾信集の注『庾開府集箋註』を書いた後、徐陵の別集の注釋にとりかかったが、未完に終った。それで未完の卷六に注して「備考」と題し、箋註を完成させたのが、ほかならぬ徐文炳なのである。この『徐孝穆集箋註』六卷は、現在、世界書局から中國名著全集第六集の一冊として刊行されている。吳兆宜の『玉臺新詠箋註』と『徐孝穆集箋註』とは、まさに程琰・徐文炳という二人の盡力のもとに、阮氏のいわゆる「全璧」となったのである。

刪補した程琰は、後に名を際盛と改め、字は煥若、東治と號した人である。『清史列傳』卷68儒林上等によれば、初め格調説を唱えた沈德潛から詩を學び、晩年には鄭玄の學をきわめ、その經典讀書の法は段玉裁のそれと暗合するといふ。乾隆四十五年（一七八〇）の進士、以後、奉職三十年の役人生活を送っており、乾隆三十九年のこの刪補本の刊行は、進士及第前の比較的若い時代の産物であるらしい。ほかに『説

文古語考』『禮記古訓考』『周禮古書考』『儀禮古文今文考』『駢字分箋』『續方言補』『清河偶鈔』『稻香樓集』等の著書があるといふ。

小尾郊一・高志眞夫編『玉臺新詠索引』所收のテキストは、乾隆甲午（三十九年）冬新鐫、稻香樓藏版『玉臺新詠箋註』の影印本である。程琰に『稻香樓集』の別集があることからすれば、稻香樓とは程琰の藏書樓の名であり、従つてこの『箋註』本は、いわゆる原刻本ということになる。『箋註』本のテキストとしては最上のものといえよう。

この版や四部備要本等では、程琰は原名のまままで書かれていたが、靜嘉堂に藏する竹添井々（一八四二〜一九一七）舊藏の『箋註』本（本衙藏板、世經堂發兌）には、卷末に付す「長洲程琰東治跋」の「琰」の字の箇所「際盛」の二字がつけられ、埋木を施した形跡がうかがわれる。この本はまた各卷冒頭の「琰」の字も「際盛」になおしてあるが、その他は全く稻香樓藏板と同じである。従つてこの版本は、稻香樓藏板の一種の控改本であらう。⁽¹⁹⁾

(五)

最後に乾隆二十二年（一七五七）の自序をもつ紀容舒の『玉

臺新詠考異』十卷に觸れたい。すでに述べたように、紀容舒は常熟の門人の家から趙均舊藏の宋版を手に入れている。紀氏の調査によれば、この宋版(陳玉父本)は、すでに誤訛の多さ・體例の不備・詩の増入等のある麻沙本であると推定されたが、なお「明人の臆改の本に勝る」として、それを底本に選び、朱熹の『韓文考異』の體例にならって、約四か月の期間をかけて作成したものである。

紀容舒は字は遲叟、號は竹崖、この書の執筆は、その晩年であった。『考異』本は、馮舒の(馮氏校本)や吳兆宜の『箋註』本をしばしば参照すると同時に、『文選』『樂府詩集』『古詩紀』『選詩補註』『八代詩乘』『古詩類苑』などの總集、『西溪叢語』『後村詩話』『滄浪詩話』などの詩話類、『說文』『玉篇』『廣韻』などの字書等を縦横に驅使して作成されたものである。いわば、明末から清初にかけての『玉臺新詠』研究の成果に立脚する著作であり、鈴木虎雄博士は「尤も參考に資するに足る」(岩波文庫・例言)と評し、また内田泉之助博士は「この考異本は注釋の上にも資すべき點多く、余も本文の考定の外、注解に當たりて最も多くの參考を得た」(明治書院・解說)と評している。また『四庫提要』では、

明末・清初の『玉臺新詠』研究の確立(植木)

雖未必一一復徐陵之舊、而較明人任臆竄亂之本、則爲有據之文矣。

と評している。この部分は、いわゆる原本提要(『文淵閣』四庫全書提要)卷一〇六)に見えない箇所であり、實は紀昀が父の書を評した言葉である。

本書は現在、清末の王灝が郷里の先賢の書を集めて、光緒年間の刊行した地方叢書(畿輔叢書)の中に收められており、今日容易に見ることが出来る。また『考異』の完成は、程琰の『箋註』刪補本が出版される以前であり、従って『考異』中に引かれる「吳顯令註」「吳顯令註本」の注記の中には、現在通行の刪補本には見られない吳氏の舊姿を斷片的ながら探ることが出来る。たとえば、徐陵の序の「萬年公主非無累德之辭」に對して、紀容舒は、

吳顯令註本、改累德爲誅德。引晉書左貴嬪、作萬年公主誅德、爲證。

と記すが、程氏刪補本では、「累」字の下に「按、一作誅」という簡単な割注があるだけである。

紀容舒の校勘態度は嚴正かつ慎重である。このことは、『考異』中の次の言葉によっても、ある程度推測することができるだろう。

○未敢輕改古書、姑附識異同於此也。

○古語、今不盡詳、未敢必斷其誤、當闕所疑。

○但舊說相沿已久、未敢輕改古書、姑附識於此。

○或爲孝穆所刪取、或爲後人所竄易、或爲傳寫所訛脫。均無顯證。不欲輕改舊本、姑仍宋刻所載、而附識其異同如右。

いずれも、單なる憶測等によつては古書を改めぬとする嚴正な態度であり、同時に輕々しく古書を改める（明人）に對しては、「明人誤つて改むるなり」「明人、文義を推求して、意を以て之を改む」などと嚴しく批判している。このように、紀氏の態度は嚴正かつ慎重なものであり、その根底を貫く校勘方法としては、徐陵の編定した體例（義例）を發見して、それに基づいて書全體を検討し、それにあわないものを疑う、という方法が一つ指摘できるように思われる。

ここで、『考異』中にみられる紀氏の注目すべき説を指摘してみたい。

①目録の卷五・六・七の體例が不備で、しかも他の卷のそれと異なるので、「麻沙の人、意に隨つて之を書く」證據と考えた。この宋版麻沙本説は馮班によつて提出され、紀氏により補強されている。

②卷五から卷八の四卷は、いずれも梁代の五言詩を集めたものであるが、梁の武帝や皇太子らの詩がはじめの卷五に入らずに、その間（卷七）にはさまれているのは、一見編次の誤りのようであるが、これは漢以來の傳統に沿うものであると論じた（目録）。

③宋の陳玉父がすでに増入と考えた詩（卷七の武陵王の「閨妾送征人」詩や卷九の沈約の「古詩題六首」）以外に、馮舒の説を參照しながら、卷六の徐悱の妻の詩（答唐娘七夕所穿針）や卷十の劉孝威の詩二首（古體雜意」「詠佳麗」）も詩の増入とする説を提出した。また卷一の李延年の歌詩や陳琳の「飲馬長城窟行」詩は、その詩體から判斷して卷九に入るべきだと論じた。ここには、「孝穆の體例」を究明しようとする紀氏の校勘方法を見てとることが出来る。

④梁代編纂説の傍證を一つ付け加えたこと。王融が宋版の中で例外的に字で記されるのは、南齊の和帝の諱（寶融）を避けたものであり、この「王元長」という呼び名は齊・梁期に行われている（『詩品』の例あり）。従つて、この呼稱は『玉臺新詠』梁代編纂説の傍證となりうる。

⑤昭明太子にも艶詩があるのに、集中（宋版）に一首も收めないのは、昭明太子の死後、蕭綱（簡文帝）が太子となり、「意

に避くる所有りて、武帝・簡文の間に更に一人を置くを欲せず。故に屏よけけて録せざるのみ」と解した。この説は、徐陵の編纂意圖と關連して興味深い（卷七七）。

⑥卷七の蕭氏父子兄弟の詩は、徐陵が當時、直接諸王の詩を選録したものであり、諸卷の中でも最も信頼度が高い。従つて作者・作品校定の據りどころになりうる（卷七七）。

⑦張衡の「四愁詩」の序文を省いてあるのは、徐陵の意圖に基づくとして、

孝穆刪去之。蓋此集之所錄、皆褻裾脂粉之詞、可備艷體之用。其艷體而見收者、亦必篇中字句有涉閨幃。

と述べている。もし序をつけると、艷詩のわくからはずれるので省略し、單に女性に關する字句があるゆえに選んだと考えたのである。これは徐陵の選詩基準の杜撰さを指摘したものととして興味深い（卷九）。

⑧卷八に編者の徐陵自身の詩を収めることについて諸説を提出していること（走筆戲書應令）。

これらは、いずれも紀氏の見識や判断の卓越さを示すものである。

（六）

このようにみえてくると、明末から清初における『玉臺新詠』研究は、明代中期を風靡した古文辭派の文學主張に對する批判や正の中から生まれしてきたが、古書のテキストを比較對校して本來の姿に近づけようとする考證學的方法によつて貫かれていた。従つてその研究は、『玉臺新詠』を單なる艷歌の愛すべき總集であるとする嗜好的關心に終始するものではなく、本書を一つの眞摯な研究對象とする學究的認識に支えられていた。趙均の覆宋本の刊行、馮舒・馮班・孫法頂・葉樹廉・葉裕らによる多くの校本の成立、吳兆宜による注釋本の作成、そしてこれらの成果を踏まえた紀容舒の『考異』本の成立。これらはいずれも『玉臺新詠』に關する研究が明末・清初の時期に集中してなされ、今日の『玉臺新詠』研究の基礎がこの時期において確立されたことを示している。

『玉臺新詠』と並稱される『文選』の研究史においては、隋末・唐初の時期に、曹憲・許淹・李善・公孫羅・魏模等の文選學者が輩出し、音義や注釋に關する書が次々と作成され、いわゆる文選學が成立した。これに對して、『玉臺新詠』の研究史において、『文選』の隋末・唐初に匹敵する時期は

明末・清初であり、この明末・清初こそ、いわば「玉臺新詠」の確立した時期として位置づけることができるだろう。そしてこの「玉臺新詠」という新造語の使用が假りに許されるとするならば、紀容舒の『玉臺新詠考異』十卷は、この玉臺新詠の到達した一つの頂点を表す書として評價することができる。わが國で譯注書を出版された鈴木・内田兩博士がこの書を高く評價するのも、この意味において、ごく當然なことであつたわけである。

〔注〕

- (1) 『内閣文庫漢籍分類目錄』に著録する三一九函・六號の明刊本八冊。ただし、あとの二冊は鄭玄撫撰『續玉臺新詠』五卷。
- (2) 逆に宋版所收の一部の作品を脱している。
- (3) 内閣文庫所藏『續玉臺新詠』所收。
- (4) 朱東潤の『中國文學批評史大綱』第五十三の馮班的條所に引。
- (5) 錢謙益「馮嗣宗墓誌銘」(『初學集』卷55) 参照。天啓二年(一六二二) 五十歳没。
- (6) 吉川幸次郎著『元明詩概説』(岩波中國詩人選集の二集)の二三四頁参照。

- (7) 鈴木修次・一海知義「馮惟訥とその詩紀」(『日本中國學會報』12集)。
- (8) 「趙靈均墓誌銘」(『初學集』卷55)。
- (9) 四部備用本『箋註』所收。
- (10) 宋版の中で徐陵がなげ字の孝穆で書かれているかについては、『考異』卷八の徐孝穆「走筆戲書應令」の條参照。
- (11) 『箋註』本所收の馮班の題記。
- (12) 趙均覆宋本の解題は、大倉文化財團所藏『宋元明版本展解説目錄』(大倉集古館。阿部隆一博士執筆) にも見える。
- (13) 『箋註』本所收。
- (14) 『有學集』卷46所收。
- (15) 『重輯漁洋題跋』所收。
- (16) 鄧邦述『寒庚山房藏善本書目』卷2所引。
- (17) 『國朝耆獻類徵初編』卷四二七文藝傳(吳兆騫傳) に引く徐鉉撰墓誌銘に、「余爲吳氏壻、余亡妻與漢槎(吳兆騫)爲兒妹」とある。
- (18) 郭紹虞『中國文學批評史』六七の「從馮班吳喬到趙執信」に引く馮班的「陳鄴仙曠谷集序」参照。
- (19) 民國の甘鵬雲編『崇雅堂書目』卷十四に「乾隆甲午、程際盛、校刻本」として著録するのは、おそらく竹添井々舊藏本と同板であろう。
- (20) 『考異』卷八に「考穆編歷代之詩、不應自收已作。疑自此

以下、皆後人所附入、如前徐排婦及武陵王諸作。然此書乃奉簡文之命而作、或當時愛重其文、使自編入、如太平廣記之收徐鉉稽神錄。又或自喜其文、偶以入選、如芮挺章之國秀集。尙均爲事理所有」とある。

(※) 宋版の陳玉父本については、拙稿「幻の宋版『玉臺新詠』陳玉父本を中心として」(早大『中國古典研究』第26號所收)を参照。本稿と相補う言及がある。